

上郡町の偉人

大鳥圭介

第三十三回「鵬程万里」中川由香

国土を守る武士の心得、士道の体現者

「武士道」は日本人の美学として様々な作品で描かれています。武士道は古来の用語ではなく、新渡戸稲造が欧米に向け日本の思想の説明に用いた言葉です。一般化したのは明治三十年代と、菅野覚明氏は著書「武士道の逆襲」で指摘します。戦闘主体者である武士の流儀は血生臭く、忠義や名誉を重んじる武士道とは別物でした。江戸時代に太平の世になり、武士は農工商の上に立つ階級となります。その倫理は儒教の仁義忠孝で説明され、戦国武士の思想とは異なります。この江戸時代の武士の思想は「士道」と呼ばれました。

そして明治の士族の役割について、圭介は「士族」の演題で明治三十二年、東京学士会院で講演しました。

古代、推古天皇の衛視や防人、平安時代の豪族、鎌倉幕府による封建制度の成立、戦国時代、そして三百藩による三百年の徳川幕府の治世まで、武士の変遷を圭介はま

めます。「徳川太平の世が続いたのは、諸侯の元で武士が主家を節を尽くし、土地の開墾、山林の繁殖、河川の開通を行ったから」とします。

日本は地震洪水干害が多発し、地盤は大陸に比べ軟弱で複雑です。太平の世は、自然災害との戦いでした。秀でたインフラが無ければたちまち災害で被害を受けます。農地開拓、森林保護、河川改修、利水治水は国土の保全と発展に必須です。その為には公益を支える倫理と技術力双方が必要です。圭介は「武芸に加え、学校を建設し学問を磨き、徳義を養い、土風が文化の恩恵に浴した為に万民の安楽が為しえた」と、「武」に加え「文」と「徳」の重要さを強調します。封建の意義は、領地の区域ごとに山野を開拓し土木事業で河川堤防を建設し、産業を奨励して国力を増したことにありました。織田信長が戦国に覇を唱えたのは、単に鉄砲術が優れていたからではなく、道路建設で物流を促進し、利水で生産性を上げ、

国力を蓄えたからでした。武力とはインフラと生産力に支えられた国力であり、士道はそれを支える信条といえます。徳川の世は、武門の保護で、戦乱無く産業と商業を発展させ、国力と人口を増した三百年でした。

武士の鍛錬といえ、まず剣術や弓馬術を思い浮かべます。しかし圭介は「武事の鍛錬のみに日夜苦心し文事を疎かにしては人道を誤る」と述べます。武士には世を平和に国を豊かにする責任があり、そのために法令や技術に秀で、私心なく節義を尽くすことが士道だとします。そして明治士族は「剛毅質朴な気風で国事に忠誠するべきだが、現在は躁急の悪風があり忍耐に欠け、忠実暖良の美質を失った人が多い」と憂慮します。圭介は「開明の世風に従い、国事に鍛錬して天下の公益を謀り、永く名節を蓄積し、正道の富貴を得ることこそが士族の名誉だと述べます。社会の先端で公益を追求するこの姿勢は、弁護士や公認会計士、技術士など現代の士業の職業倫理でも必ず求められます。また「拝金に執着するのは非道。栄華を極めても、廉節を汚す位なら貧賤に安んじるほうが良い」と

します。これは正にCSR(企業の

社会責任)の概念です。不正手段で利益を得る企業は、指名停止、知名度悪化など社会的経済的な制裁を受け、結局衰退します。

圭介は「士族は廉潔の節操を失わず、文明学術の新路に進み活眼を開き、四海一家、視同仁で、内治の堅実を図ることが無二の必要」つまり、私欲無く正しい行いをし、研究開発し技術導入に努め、真心と礼儀を尽して世界中みな家族のように交わり、出身や敵味方問わず公平に人を遇し、内政を堅実に行うことが何より必要、と結びます。

圭介が幕臣として武士の位にあつたのは四年間のみでした。圭介は陸軍を近代化し、軍人に平民を雇入れることで、武士の戦闘階級としての役割を終わらせたこととなります。そして圭介は国を治める立場としての武士の役割を、士道の語を用いて明確に再定義しました。

現代日本は、気候変動で不安定な自然に対応するため、防災とインフラの拡充が国の喫緊の課題です。圭介の説く士道は、今もこの分野を先導する公務員、官僚、技術者、民間企業の本物の心得です。圭介こそが、現在に通じる士道の体現者だったといえます。

まちの話題

トピックス

暮らしの案内

お知らせ

イベント

スポーツニュース

鵬程万里

情報ステーション

相談窓口・新着図書・番組表

町長コラム